

スペイン近世社会におけるモリスコ問題へのアプローチ

— 移動するモリスコ、表象されるモリスコ —

増 井 実 子

抄 録

スペイン近世社会においてキリスト教徒と対峙したイスラム教からの改宗者であるモリスコを取り上げ、追放までの経緯を概観するとともに、筆者が関心をもっている近年の研究動向について紹介する。

キーワード：モリスコ、近世スペイン、人の移動、表象、研究動向

1. スペイン近世におけるモリスコ問題—強制改宗から国外全面追放まで

スペイン史研究において、近世におけるイスラム教やユダヤ教からの改宗者問題は、マジョリティーであるキリスト教徒の社会に緊張感を与え軋轢の原因となってきたがゆえに、常に関心を集めてきたテーマである。本稿では、イスラム教からの改宗者であるモリスコを取り上げ、15世紀末から17世紀初めまで継続したモリスコ問題の経緯について概観した上で、筆者が関心を持っている近年の研究動向を紹介する。

1492年、カトリック両王イサベルとフェルナンドはイベリア半島最後のイスラム王朝であったナスル朝の首都グラナダを攻め落とし、スペイン中世を貫いてきた対イスラム戦争「レコンキスタ」を終結させた。征服直後の時期には、スペイン各地に残留したムスリムたちは、征服時にキリスト教徒側と締結した降伏協定に従い、一定の税の支払いと引き換えにイスラムの信仰や生活様式を保持することを許されていた。しかし、カトリック信仰を社会的紐帯として国家の凝集力を高めようとしていたカトリック両王やその後のハプスブルク朝スペインの王たちにとって、残留ムスリムの存在は看過できない問題であった。1502年および1525年に発布された勅令により、ムスリムたちは「国外追放かカトリックへの改宗か」の選択を迫られ、多くが住み慣れた土地に残るために改宗を選択した。ムスリムから改宗した彼らは「モリスコ」¹や「クリスティアーノ・ヌエボ（新キリスト教徒）」²などと呼ばれるようになる。

¹ morisco は moro（モーロ人）から派生した言葉で「取るに足りないモーロ人」もしくは「モーロ人もどき」という蔑称。モーロ人（英語に転じるとムーア人）は北西アフリカの「イスラム教徒」を指す呼称だが、この時代のイベリア半島でも同様の意味で使用されていた。

² この時代の cristiano nuevo（新キリスト教徒）とは、イスラム教やユダヤ教から改宗して新たにキリスト教徒になった者たちを指す。対立概念は cristiano viejo（古くからのキリスト教徒）で、イスラムやユダヤの血が混じらない「由緒正しい」キリスト教徒を表す。

改宗はしたものの、モリスコたちの多くは秘密裏にイスラム信仰を保ち続け、カトリックの聖職者による教化活動も成果が挙げられなかった。16世紀を通じてカトリック住民との間に絶え間ない軋轢を生み、社会の不安定要因となっていたモリスコに対し、1609年、当時の国王フェリーペ三世は国务会議からの要請を受け入れ、彼らをイベリア半島から全面追放する決断を下した。

17世紀初頭のスペインにおいては、各地にモリスコの共同体や集住地域が存在していたが、その規模やカトリック住民との関係性は非常に多様であった。その中でもモリスコの人口が多く、共同体組織が強固だったのは、スペイン東部のバレンシア地方であった。また、地中海に面したこの地域には、16世紀を通じて、オスマン帝国支配下のバルバリア³から私掠船がしばしば姿を見せ、沿岸地域の村落で略奪を繰り返していた。こういった海賊達を手引きしていたのが秘密裏にイスラムを信仰しているモリスコ達だという訴えが、都市当局や異端審問所に度々出されていた。国王フェリーペ三世の周囲には、寵臣レルマ公爵をはじめ、敬虔なカトリックであった王妃マルガリータ、バレンシア大司教リベーラやドミニコ会士ブレダなど、モリスコ追放に積極的な人物が揃っていたこともあり、1609年9月、まずはバレンシアのモリスコに対し追放令が發布された⁴。

追放までの手順も地域によりばらつきが見られるものの、バレンシアにおいては追放の指示を受けてから概ね三日以内という非常に短い期間で、モリスコたちは当局が指定する場所に集合するよう命じられた。その際、携行できる動産の持ち出しは一部認められていたものの、土地や家屋などの不動産は領主に引き渡さなければならなかった。この強制的な命令に対し、バレンシアの山間部⁵ではモリスコの反乱が起こったが、追放を監視するために派兵されていたスペインの歩兵連隊によって鎮圧された。結果として、バレンシアのモリスコは、近隣の港からスペイン海軍の軍艦に乗せられ、約四ヶ月という短期間でその大部分が北アフリカに追放された。

追放令はその後スペインの各地域にも次々と公布されていった。主な地域を挙げると、1610年1月には南部のアンダルシアとムルシア、同年5月には北東部のアラゴンとカタルーニャ、さらに同年7月には中央部のカスティーリャおよび西部エストレマドゥーラで追放令が出された。最後の追放令が出たのは1613年10月であり、リコーテ谷（ムルシア）に集住していたモリスコの一団がスペインから去ったことで、四年にも及ぶ追放事業は終結した。

モリスコの国外追放は海軍や陸軍の動員が不可欠であり、多額の費用を必要とする非常に困難な事業であった。それにもかかわらず、スペイン王権が17世紀初頭のこの時期に実施にすることができたのは、当時の国際情勢に帰するところが大きい。フ

³ 16～19世紀にかけてヨーロッパ人が地中海のアフリカ北西岸一帯を指した呼称。現在ではマグリブと呼ばれているモロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアの辺りを指す。

⁴ バレンシアのモリスコに対する追放は1609年4月9日にフェリーペ三世により承認され、同年9月22日バレンシア副王カラセーナ侯爵の名で追放令として公布された。

⁵ バレンシアの中心地から西へ約50 kmに位置するムエラ・デ・コルテスでは特に激しい反乱が起こった。



外出着のモリスコ女性⁶

ランス、イギリスと相次いで協定を結び、さらに最大の懸案事項だったオランダとも十二年間の休戦協定を結んだことで、偶然にも周辺国との戦争状態からいっとき抜け出すことができた。その結果、海軍や陸軍の余力を、モリスコの国外輸送に振り向けることができたのである。

追放事業の結果、イベリア半島から去ったモリスコの数はおよそ 30 万人と言われている。イスラムの優れた灌漑技術を継承していたモリスコは優秀な農民であり、また絹織物や金属加工など手工業においても卓越した技術を持っていた。農村においても都市においても優秀な生産者であったモリスコを一挙に失った事は、スペイン経済に大きな打撃を与えた。16 世紀と比較した場合、17 世紀のスペインは衰退の時代と評されるが、特に経済的衰退に関してはモリスコの追放がその一因と考えられている。影響の大きかった地域はバレンシアで、総人口の約四分の一（約 12 万人）を失い、農業においては米とサトウキビの栽培が著しく減少した。金融の分野では、モリスコが大量の貨幣を国外に持ち出したことで貨幣不足が深刻化し、1613 年に金融機関の破産を招いた。アラゴン、グラナダ、ムルシアといった地域でも、程度の差はあれ、同様の現象が起こった⁷。

⁶ 出典：http://dlib.gnm.de/item/Hs22474/html, Christoph Weiditz, *Trachtenbuch*, 1530～1540 頃 Germanisches Nationalmuseum 所蔵。Weiditz(1498-1559)はドイツ人の画家で、1528年から29年にかけてイベリア半島に滞在し、住民のスケッチを多数描いている。その中にはモリスコを描いたものも含まれており、当時のモリスコの外見や衣装を知る貴重な資料となっている。

⁷ 反対にカスティリーヤ地方は総人口の2%程度しか失わずに済んだため、経済活動への影響は比較的少なかった。

2. これまでのモリスコ研究と近年の動向

前節で述べてきたように、16、17世紀のスペイン社会に大きな影響を与えたモリスコという社会集団であるが、スペインの歴史研究は彼らを対象とした研究をどのようなアプローチで行ってきたのであろうか⁸。

すでに19世紀には、DanvilaやBoronatが16世紀の聖職者や年代記作者が残した膨大な史料に基づくモリスコ研究を残している。しかしこの時代は、モリスコ問題を主に1609年から14年にかけての追放に限定し、それがスペインにとって是か否かを問う研究が多かった。また1939年以降のフランコ独裁時代の特に初期においては、国際社会から孤立した状況の中でスペイン・ナショナリズムを高揚させるため、「太陽の沈むことなき帝国」を創出したハプスブルク朝期の歴史が神話化されるようになった。そのため、改宗したにもかかわらず秘密裏にイスラム信仰を保ち続けたモリスコたちは、帝国の神話を汚す存在として、研究そのものが敬遠される傾向にあった。

こういった状況に変化が生じる契機となった研究が、1949年に出版されたフランスの歴史学者Fernand Braudelの『地中海』であった⁹。Braudelは大著の中でモリスコ問題に章を割き、この問題が異なる文明が衝突する際に起こる普遍的な事象であり、追放に至るまでのキリスト教徒とモリスコの対立の過程に着目することが重要であると指摘した。現在でこそこういった視点は特に目新しいものではないが、モリスコ問題の普遍性を的確に捉えたBraudelの視座は、その後のモリスコ研究を支えるものとなった。

1950年代以降になると、モリスコ研究は多様なアプローチで進められるようになる。Lapeyreによる統計学を使ったモリスコの人口研究¹⁰、膨大な異端審問所の資料をもとにBraudelのいう「文明の衝突」が当時のキリスト教徒とモリスコの間で日常的にどのように生じていたのかを明らかにしたCardaillac¹¹の研究などが、その先駆けとなった。また1970年代後半から、スペインでは地方史研究が進展を見せるが、それに伴いモリスコ研究も地方の文書館史料をあたったものが増えた。各地のモリスコ共同体の内部構造の考察や、キリスト教徒側に支配されるようになったモリスコが共同体の既存の役職を変容させてながらキリスト教徒側と結びついていく過程の検証といった興味深い研究が現れるようになった¹²。さらに、モリスコたちの世界観や心性を明らかにできる史料として期待されているアルハミーア文書¹³の解読・研究も進められた。

⁸ 20世紀末までのモリスコの研究史については 増井実子「一六世紀のモリスコ問題」立石博高他編、『スペインの歴史』昭和堂1998年 pp.132-137

⁹ Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris, 1949
日本語訳：浜名優美訳『地中海』全5巻、藤原書店、1991-1995年

¹⁰ Henri Lapeyre, *Géographie de l'Espagne morisque*, Paris, 1959

¹¹ Louis Cardaillac, *Morisques et Chrétiens. Un affrontement polémique (1492-1640)*, Paris, 1977

¹² 代表的なものとして Serafín de Tapia Sánchez, *La comunidad morisca de Ávila*, Salamanca, 1991

¹³ アルハミーア (Aljamía) とは、モリスコたちが書いたアラビア文字で表記されたカスティーリャ語文を指す。特に16世紀中頃に多用された。

隆盛となった研究活動を反映して、1990年代には「モリスコ学＝Moriscología」という造語も使用されるようになった。アリカンテ大学の Epalza は、追放後のモリスコが北アフリカでどのように受容されたかという問題についてマグリブの研究者と共同で実証的な研究を進めた碩学であるが、この「モリスコ学」という領域を次のように定義している。

「モリスコ学とは、歴史研究における一分野であり、モリスコという明確な対象を持っている…(中略)研究を進展させるために多様で相互補完的な史料や手法を使用し、彼らがいた時代や社会の真実の姿について広範かつ確実な知識を得るものである。¹⁴」

モリスコ学という名称を得て、21世紀に入るとモリスコ研究は更に多様な展開を見せている。このように活況を呈するモリスコ学の中で、筆者が特に注目している研究動向を2点紹介したい。

1点目はモリスコの移動を扱った研究である。20世紀のスペイン史研究においては、モリスコの追放が完了した1614年をもって、スペインにおけるモリスコ問題も終了したという見解をとるものが多かった。しかし地中海世界における人の移動という視点に立てば、1614年はモリスコ問題が地中海世界に拡散し、新たな展開を見せ始めた年ともいえる。1614年以降のモリスコのイベリア半島からの移動については、上記の Epalza らによって研究が進められていたが、最初のモリスコ追放令がバレンシアで発布されてからちょうど400年にあたる2009年前後には、スペイン国内の様々な研究機関で追放に関するシンポジウムが開かれ、研究が一挙に進展した感がある¹⁵。

追放された約30万人のモリスコの受け入れ先は主にオスマン帝国領内であり、現在のアルジェリア、モロッコ、チュニジアなどのマグリブ諸国へは約25万人が移動している。それ以外では、エジプト、アナトリア、イスタンブルといった遠隔地にも移動している例が見られる。マグリブ諸国へはスペインの出身地域ごとにまとめて移送され、アンダルシア、カスティーリャ、エストレマドゥーラのモリスコたち約7万人はセウタ、メリーリャ、テトゥアンなどを経由してモロッコへ、バレンシア、ムルシアのモリスコたち約10万人はオランを經由してアルジェリアへ、アラゴン、カタルーニャのモリスコたちの約8万人は、タラゴーナまたはマルセイユを經由してチュニジアへ渡ったといわれている。つまり、イベリア半島の各港からスペイン、イタリア、フランス、フランドル船籍の船に乗り、北アフリカの港湾都市に移動し、そこからさらに内陸部も含めた各地に分散するという手順が取られた。

準備期間もほとんどないまま大量のモリスコが到着した北アフリカの港湾都市は、当然のことながら混乱を極めた。現在のアルジェリア北西部に位置するオランの例を

¹⁴ Mikel de Epalza, *Los moriscos antes y después de la expulsión*, Madrid, 1992, p.18

¹⁵ 増井実子「イベリア半島追放後のモリスコ—最近の研究動向から」スペイン史学会会報(97)2012年。モリスコ追放に関する研究成果をまとめたものとして、Antonio Moliner Prada (Ed.), *La expulsión de los moriscos*, Barcelona, 2009がある。

挙げると、1609年のわずか2か月でバレンシアのモリスコ数万人が到着し、港とその周辺は大混乱に陥った。さらにモリスコたちは、オランからアルジェ、トレムセン、遠くはフェズまで移動を強いられ、その道中で病気や掠奪によって命を失ったものも多かった。

さらに、ロンドン大学のCookによる最近の研究では¹⁶、モリスコが地中海世界という枠組みを飛び出して新大陸まで移動をしていた事例が指摘されている。大航海時代を迎えていた16～17世紀において、スペイン当局は新大陸のカトリック化やインディオに対する改宗活動を進めるため、少なくとも三世代にわたってカトリック教徒であったことを証明できる人々だけにこの地への移動を許可していた。しかし、モリスコの中にはこの監視の目をかいくぐって大西洋を横断し、新大陸へ到達した者が一定数記録されている。急激に広がった未知の領土の中でカトリックの布教を拡大しようと腐心するスペイン人たちにとってモリスコは忌むべき存在であり、恒常的な対立を引き起こした。大航海時代のネットワークの中でモリスコの移動の問題を大きく捉え直し、優秀な農民であり手工業者であった彼らが移動先の社会でどのように受容／排除されたかを検証するのは興味深いテーマであるといえる。

次に、注目したい研究動向の2点目として挙げるのは、モリスコの表象¹⁷の問題である。

従来モリスコ研究は、キリスト教徒とモリスコの間には客観的に明示できる相違点があるという前提で進められ、どの点が対立の原因となったのかを検証するものが多かった。しかし新たな研究動向として、そういった相違は問題とせず、キリスト教徒社会を映し出す「鏡」としてモリスコを捉え、その「鏡」に表象されるモリスコのイメージを通して当時のキリスト教徒たちの世界観や心性を照射しようとするアプローチが見られる。この手法をとった代表的な研究としては、バルセロナ自治大学のPercevalによる*Todos son uno*¹⁸（邦題：すべてがひとつに）が挙げられる。

Percevalは、これまでモリスコ研究者が依拠してきた史料の多くが年代記作者や異端審問官といったキリスト教徒の知識人によって書かれたものであるとし、こういった資料から明らかになるのはモリスコ側の実態ではなく、当時のキリスト教徒たちの価値観・世界観であると指摘している。その一例として、イスラムの血を引くモリスコが生得的に劣った存在であることを示すために、この時代の聖職者たちが頻繁に引用する「死後腐敗したムハンマド」という逸話を紹介している。ムハンマドの死後、親族たちがムハンマドの復活を信じて遺骸をそのままにしておいたところ、3日経って腐敗が始まり、野良犬や獣に遺骸を食べられてしまうという内容である。

¹⁶ Karoline P. Cook, *Forbidden passages: Muslims and Moriscos in colonial Spanish America*, Pennsylvania, 2016

¹⁷ 増井 実子「近世スペインにおけるモリスコのイメージ」常葉学園大学研究紀要, 教育学部 (30) pp.91-96 2010年(「多文化共生への価値の研究」常葉学園大学学内共同研究(研究代表者: 竹中智泰) 報告書)

¹⁸ José María Perceval, *Todos son uno. arquetipos, xenofobia y racismo: la imagen del morisco en la monarquía española los siglos XVI y XVII*, Almería, 1997

Perceval は当時の聖職者たちがこの逸話を繰り返し使う理由として、善きキリスト教徒としての理想像とは逆のイメージをムハンマドやモリスコに執拗に割り当てること、つまり「カウンターイメージ」を創出することによって、自分たちの優位性を補強していったと指摘している。「死後復活せずに腐ったムハンマド」の向こうに見えるのは、「復活して聖性を証明したイエスキリスト」や「死後も腐敗せず良き香りを保っていたスペインの守護聖人サンティアゴ」の姿である。さらに、一度創出されたカウンターイメージは、年代記、文学作品、演劇など様々な媒体を通して繰り返し補強され、キリスト教徒とは異なる「他者」としてモリスコのイメージを画一化していく。Perceval の著書のタイトルが端的に示しているように、モリスコの「すべてがひとつに」画一化され単純化されていくのである。

文化の表象には必ず表象する側の姿が投影されるというこの見解は、サイードの古典的名著『オリエンタリズム』¹⁹以降、歴史における異文化接触の問題を考える際に使われてきた概念ではあるものの、モリスコ研究にこの視点を導入したことにPerceval の研究の意義があろう。

Perceval の先駆的な研究が発表された後、表象の問題はモリスコ学において活発に研究が行われる領域となっている。2016年以降、スペイン国立通信教育大学のLlopis が中心となった共同研究プロジェクト「イベリア半島におけるイスラム教徒のイメージ(15～17世紀)と地中海との関係」²⁰は、このテーマに関して様々な成果を出しつつある。2019年にはLlopis自身とMoreno Díaz del Campoの共著により、*Pintando al converso: La imagen del morisco en la península ibérica 1492-1614*²¹(邦題：改宗者を描く－イベリア半島におけるモリスコのイメージ)が上梓された。同時代の文学や芸術において、善きモリスコと悪しきモリスコの両方のイメージがキリスト教徒たちによってどのように創造されていたのか、また実際のモリスコたちはどのような外見でどのような日常を送っていたのかについて、広範な史料から明らかにした労作である。

紙幅の都合上、本論では「移動」と「表象」というアプローチに絞ってモリスコ研究の動向を紹介した。しかし、これ以外にも多様なアプローチでモリスコ研究は進められており、こういった研究の積み重ねが、「モリスコ学」という研究領域全体に大きな活力を与えているといえよう。

(2020年1月14日 受理)

¹⁹ エドワード・W・サイード著 板垣雄三他訳『オリエンタリズム』 平凡社 1986年

²⁰ Borja Franco Llopis y otros, *Antes del orientalismo: Las imágenes del musulmán en la Península Ibérica (siglos XV-XVII) y sus conexiones mediterráneas*, Universidad Nacional de Educación a Distancia, <https://impi.hypotheses.org/> 研究メンバーとしてPercevalも加わっている。

²¹ Borja Franco Llopis y Francisco J. Moreno Díaz del Campo, *Pintando al converso: La imagen del morisco en la península ibérica 1492-1614*, Madrid, 2019

